

キトラ古墳壁画体験館四神の館(キトラ古墳壁画保存管理施設)の開館

四神像や天文図の壁画で有名な特別史跡キトラ古墳では、壁画の保存のための取組が進められています。現在は取り外した壁画の修復がほぼ終了し、今後は当分の間、保存施設で保管していきます。

2016年9月24日に、国営飛鳥歴史公園のキトラ古墳周辺地区が開園しました。キトラ古墳壁画体験館四神の館(以下、四神の館と言う。)はその中の南東部、キトラ古墳の脇にあります。開園に先立つ8月下旬、この施設にキトラ古墳の壁画を搬入しました。壁画はここで厳重な体制のもとに、将来にわたって保管されます。

四神の館の概要は、前号(No.61)の奈文研ニュースでお知らせしたとおりです。1階のキトラ古墳壁画保存管理施設が文化庁のエリアで、そこには保存科学を主とした研究員1名、アソシエイトフェロー2名、事務補佐員1名を中心に常駐して、壁画の保存等の業務にあたっています。

9月24日は午前中の開園式典に続き、午後からは四神の館が一般の人々に開放され、壁画の公開が始まりました。今回の公開は、混雑による室温の上昇等を懸念したことから、事前の申し込み制を取りました。多数の応募があり、壁画に対する関心が依然として高いことがわかります。

壁画の公開は入れ替え制で、一回10分の見学時間です。一度に入るのは最大30名程度としました。貴重な壁画に負担を与えないよう、万全の体制のもとに保存と活用の調和を図っています。今回の公開は、10月23日まで、壁画は以後も期間を限って公開していきます。

今回公開した壁画は、初公開となる天井天文図をはじめ、朱雀像のある南壁、白虎像などを描いた西壁の3面です。各壁の壁画は石室壁面から小片に分けて取り外し、それを再構成したものです。

壁画はこれまでも飛鳥資料館等で公開してきましたが、それは図像のある部分だけに限られていました。壁画は図像がもちろん重要ですが、絵画として見た場合、それだけでは十分ではありません。数々の名画を思い起こしてみてください。図像だけではなく、余白をも含めた構図として完成されていることが理解できるでしょう。キトラ古墳の壁画も、まさにそれと同じです。今回、修復の済んだ壁画をご覧いただければ、これまでの公開とはまた違った、絵画作品としての壁画をより身近に感じていただけることと思います。

新しい施設が開館し、キトラ古墳壁画の保存は新しい段階を迎えました。今後とも、奈良文化財研究所は関係する機関と協力しながら、壁画を保存し、後世に確実に伝えていくことに取り組んでいきます。

(都城発掘調査部長 玉田 芳英)



修復された西壁壁画



修復された天井天文図